六合村の人たち
「自分たちの桜」という思いが強まった

六合村の千年桜　着工前に「症状」を診断

修学院離宮　打ち鎌という道具を使って大刈り込み

第二無鄰庵　山県有朋別邸の名庭を手入れする

勢多農林高校教員時代
生徒が作った門松の前に集合

ベルリン融水苑
マルツアーン地区に日本庭園を作庭

その後、修業に出た……

「大学院終了後、桜守りで有名な京都の佐野藤右衛門師の元で五年間修業しました。最初は慣れない土地で失敗の連続でしたが、掃除や片付け仕事の見習いに始まり、年数を経るに従い、難しい仕事を任され、最後は桂離宮の改修工事の責任者として現場を切り盛りしました。

この間、日本庭園の工事や植栽工事で福井や伊勢、ドイツなど様々な地域に赴き、各地の庭や植物、様々な文化や人々に触れ合うことができ、貴重な経験を積むことができました。」

今後の抱負を……

「桜は管理ではなく『守（も）り』という発想をしなければなりません。余分な手をかけず、必要なことだけをし、温かく見守ることが重要ということです。手を加えすぎると、かえって樹木本来の生きる力を弱めてしまいます。どこか人間と似ているような気がして、高校時代を振り返ると、担任の先生には我慢強くよい守りをしてもらったと感謝しています。

自分が携わった樹木には一年に一度は会いに行くよう心がけています。悠久の時を重ねてきた各地の名木を次世代に良い状態、良い環境で引き継いでいくのが私の使命だと自負しております。自然相手の仕事は一生勉強です。桜の開花はほんの一週間、それ以外は余り意識されない存在ですが、残りの日々を開花のために桜と共につくす、そんな樹木医であり桜守りでありたいと考えています。」

前高時代
応援団長の勇姿

――― 活躍する同窓生

塩原貴浩 氏（平成６年卒）

「樹木の命を守り、育む」

平成四年秋、定期戦。会場は前高

腕を組み、長い鉢巻きを風に翻しながら、高高生を睨みつける男がいた。応援団長の塩原貴浩。

この年、前高は二年連続で勝利し、彼の身体は宙に舞った。

彼は今、敵を睨みつけることに代わって、樹木に優しい視線を注ぐ。

樹木医。その仕事は巨樹・古木の治療・保存はもちろんのこと、街路樹や公園の危険木の判定や近年問題のマツ枯れ予防対策など多岐にわたるが、桜の診断・治療依頼が一番多い。

一番印象に残っている仕事は……

「旧六合村の山奥に生育する通称千年桜の治療です。最初診断に行った時は花もまばらであちこちに枯れ枝がついており、村の方々も半ばあきらめ気味でした。皆で知恵を出し合い、身近にある資材を用い、治療当日は老若男女総出で土壌改良や剪定を行いました。

桜へ思いが通じたのか、翌年には沢山の花を付け、皆を喜ばせてくれました。」

樹木医を志したきっかけは前高時代に……

「前高に県文化財保護課から赴任した松浦利隆先生に、県の巨樹・古木の保存にあたっていた県立女子大の安森教授を紹介していただきました。そして、実家が植木屋をしていたこともあり、東京農業大学の造園学科に進学し、入学時に発足した樹木医学会に参加しました。当時は、樹木医学の黎明期で学生の会員はまだほとんどおらず、第一線の方々からご指導いただき、最新の技術や知識を吸収しました。」